

---

# ホーム

蒼山

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホーム

### 【ZPDF】

Z2719E

### 【作者名】

蒼山

### 【あらすじ】

引越しをすることになった、高校生の「俺」の一家。引越しを決めたその日から、家が泣きはじめた。

(前書き)

ホーム = home

「早く引っ越したい。」

そう思った。

素人目ながら、凄さは十分わかった。

初めてのオートロック、という興奮も手伝つたのかもしれない。

その日からだつた。  
家が泣き始めたのは。

「……あれ？ なあ、この天井こんなボロかつたっけ？」

最初の異変は、キッチンの天井の隅の方に起こつた。

「あら、ホント。はがれてるわね。お父さん帰つてきたら直しても  
らわないと」

母が言つた。

「なになにー、どうしたのー？」

鬱陶しいので妹は追い返した。

今日はたしか父の帰りが早いはずだ。内装とか、そういう関係の  
仕事をしている父に言えば、一発で直してくれるだろう。

「んー……前はこんななかつたのにな。たぶんガタが来てるんだ  
ろ？」「う

そつ言つて、父は天井を慣れた手つきで修理し始めた。

「なになにー、どうしたのー？」

鬱陶しいので妹は追い返した。

修理が終わった頃、ちょうど夕飯が出来上がった。  
久しぶりに家族そろって夕飯を食べた。

次の異変は、それから数日後のことだった。

世間の学生共は中間試験シーズンだ。

俺もそうだが。

明後日から中間試験なので、俺はいつもよりも少し勉強時間を何と言つか「フンパツ」して夜遅くまで勉強していた。

……な、何？

これ……「こつ……五乗の展開……公式……？」

……覚えるの？ コレ。

……ああ、頭に入らない。

リフレッシュが必要だ。

必要だ。「だ」、か。「ダイエットコーク」、だな。

俺は一階のキッチンへ行き、冷蔵庫からダイエットコークを出して、ペットボトルのままがぶ飲みした。

その時だった。

ペリッ……。

何かが剥がれる音がした。

俺はダイエットコークのボトルを置いた。

そして、キッチンの天井の隅の方を見た。

「……」

天井が、剥がれていた。

父は内装には仕事柄詳しい。

「……というか、それを仕事にしている。失敗なんて……。弘法にも筆の誤り、か。

俺はペットボトルを冷蔵庫に戻し、二階の自室へ戻った。

部屋に入る際、今まで軋んだことの無かつた部屋のドアが軋んだ。やはりガタが来ているのだろうか。まあいい。

俺は勉強する気がとっくに失せていたので、さっさと寝ることにした。

次の日。日曜日だ。

変だなあ、おかしいなあ、そんなハズないだろ。……などとブツブツ言いながら、父は天井を直していた。

ちょうどこの日、家の彼方此方で異変が起き始めた。

フローリングやドア、柱などが軋み始め、窓の滑りが悪くなり、壁紙が妙に剥がれやすくなつた。台所以外の天井も剥がれ始めた。異常だ。

何だ？この家に何かいるのか？

いや、そんなハズはない。そんなモンがいたらたまんねえ。

そういう事は極力考えないようにして。そんなモン存在するハズがない。

と、なると……やはりガタが来ているとしか考えられない。しかし仮にそうだとしても、唐突にガタが来すぎている。絶対におかしい。

「んー、やっぱこの家もうダメなんだな。引越し決めて良かつたよホント」

壁の修復を終えた父が言った。

その時、直したばかりの天井が僅かに剥がれたのに、誰一人として気が付かなかつた。

ただ一人、俺を除いて。

…… どうか。そうだったのか。

おまえが

おまえが

おまえが、泣いていたのか。

俺の計画は、引越しの準備と共に着々と進んだ。

……試験勉強の際に出し惜しみしたヤル気を活用して、俺は引越しまでにこの家を修繕することにした。

父親の道具を使えば、出費は少なくて済む。

足りないものはホームセンターで万引き……もとい、購入及び失敬

するにしよう。

今まで世話になつた、せめてもの御礼だと思つて修理していった。まあコレで泣き止んでくれればいいのだが……と少々不安ではあつたが、思いというものは何故か伝わるもので、俺が修理を始めてから家は泣かなくなつた。

毎日少しづつ修理し、そして、引越しの日がやつてきた。

ほとんどは引越しのトラックに任せ、自分たちの持つ最小限の荷物だけを鞄に詰め込んだ。

引越しの準備は整つた。

あとは……。

俺は自分の部屋へ戻つた。

そこでの修繕を終えなければ。

ドアと反対側の壁の壁紙が少し剥がれている。

昨日見つけたものだが、部屋のものが全てなくなつたぶん、余計に目立つて見える。

「これで……最後だな」

俺は家を、治した

それから数ヶ月。

季節は夏真つ只中。

下校時刻になつてもまだサンセットが挙めない日々がずつと続いていた。

いや、お日様、そんな頑張らなくてもいいから。

正直……クソ暑すぎてたまりません。

まあ、そんな事はおいといて。

あの家は、どうなつただろうか。

俺は唐突にそんな事を思った。

引っ越してからしばらくはそんな事ばかり考えていたが、いつの間にか考えなくなつていた。

それが、今なぜ？

この何ともない 強いて言えばただクソ暑いだけの 下校途中に、なぜそんな事を思い出したのだろうか？

などと考えつつ家へと着々と歩みを進めていたのだが……。

あれ？

「……前の家の……。

俺は道を間違えたのか。

暑さのせいか、それとも前の家のことを考えていたからなのか、いずれにせよ、俺は「学校から家までの道を間違える」という、小一並みの間違いを犯してしまったのだ。

高一であるにもかかわらず。

俺は新しい家ではなく、前の家の方へと来てしまったのか。

と、俺が一人でへこんでいると、どこからか声をかけられた。

「久しぶり」

後ろを振り返ると、見慣れない少年がいた。

おそらく俺と同一年くらいだろう。

顔は知らないが、何故だかどこか懐かしい感じがする。

「家のコト、気にしてただろ?」

いきなり考えていた内容そのままを言われたので、俺はかなりびびった。

つてゆーか、

「どちら様?」

とこう俺の問いを完全にスルーして、少年は言った。

「家は元気だ。新しい入居者が来て、まあうまくやつてるよ。じゃあ、俺はこれで」

少年は言いたいことだけ吐き出して、どこかへ行ってしまった。

……前の家の方向だった。

……つか。あいつ……。

「……良かったよ。泣き止んでくれて。改めて、色々とりがとな」

俺は前の家の方を向いて、そう言った。

(後書き)

いつも、蒼山です。

本文よりも後書きを書くほうがなんか数倍くらい楽しい俺は異常か。  
などといつ疑問が頭の中に今浮かんでおります。

あー……でもやっぱ後書きはたのしいよね？（何故に同意を求める  
？）

でも後書きってスグ書くこと無くなるんだよなー。  
どうしたモンか……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2719e/>

---

ホーム

2010年10月28日05時12分発行